

21-7

特16
493

164
10/18

越後一之宮 彌彦明神略傳

[非賣品]

013854-000-0

特16-493

弥彦明神略伝(越後一之宮)

樋口 源吉 / 著

M27

ABB-0069





● 明神の御殿

● 目録

● 明神の皇族

● 明神の忠誠

● 明神の光榮

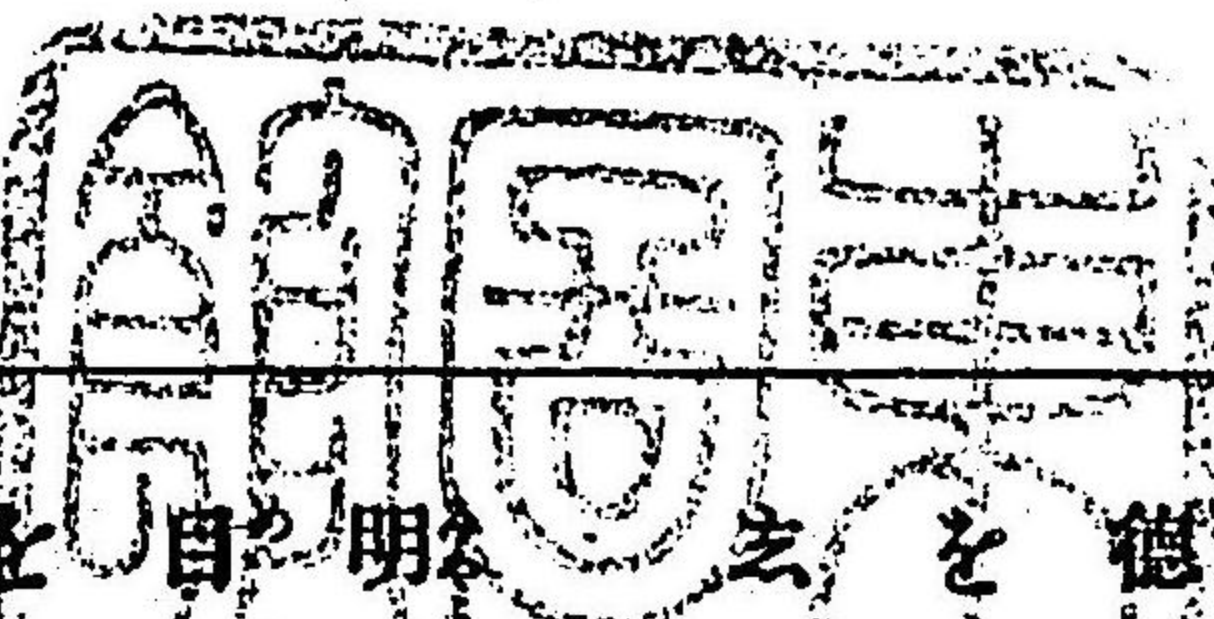
● 宮
● 明神の降起
● 高志の要害
● 明神の部下
● 皇子の北征
● 明神の征韓

● 高志の要害

● 明神の部下

● 皇子の北征

● 明神の征韓



● 明神の皇族

彌彦明神は天の香山命と稱へまつる又高倉下
 も申し傳ふるなり明神と畏くも我邦天祖天孫神は
 支孫にまして雄武英烈比かく又よく經世濟民は術に通し
 玉ひたり故に威望天下を壓し支族四方に蔓るそれ勳功偉
 徳に赫々たる千古に炳焉あり今我州は降臨し玉へる由來
 をのべ我州に勳功德澤を遺し玉ふ次第を明して州人に知
 るべし

● 明神の忠誠

明神の皇族にますこと前よのふるり如し而して万世一系
 自出度玉室の皇孫を輔佐し強を挫き逆を伐ち國を定め民
 を恵み玉へり

皇孫神武天皇の日向より東征し中土の逆徒を討ち玉ふや



皇孫神武天皇

皇兄五瀨命と打死し玉へ軍兵病み疲れ勢ひ危く見へけれ
 は明神痛く慨き天神地祇に祈り只管皇軍の全捷を願ひ
 玉ひしに不思議なるかな一振の寶劔空中より躍り落ち
 るを深く欣ひ之を天皇に獻じ玉ふ此より皇軍は兵氣大
 に振ひ戦ふことに捷ち四疆の逆徒忽ち平定せり明神の
 忠誠と万古臣民の龜鑑と云ふへ

●明神の光榮

明神の至誠天地を感せまめ戦士もまた勇まらち逆徒日々
 敗北しり天皇遂に天下を統一し玉ひければ即ち都を大和
 に定め宮殿をたて大御位に即き大に百官に恩賞を玉と
 ける就中明神の勳功莫大なりとて越國を一手に治むへ
 く詔を玉へて御委任おらせらる當時天皇の天下に君臨
 し玉ふ英彙俊傑雲れ如し

然るも徳望隆に門地高く文武兼備の明神を擇玉ふこと
 賢き欲慮と云ふへ元來越國梟雄多く古より治めかす
 然れども天照皇大神の御弟素戔雄尊の民にして尊れ五
 世は孫大國主命の經綸し玉へたる古地なれと明神にと
 りては此上なき榮譽なりと云ふへ明神天皇の任命
 を被り玉ふや欣然として喜び眉宇に溢を直ちよ越地に降
 り玉へるを理なり

●明神の降越

古より明賢者の地理を制して人心を収るごとその所見大
 抵相同し越は強大なり之夷會ヲオチの據りて勢威を奮ひ
 所なす爾後大國主命來り治め玉て又夜星なるもの誅に
 服しぬ明神の降臨又この地を卜し玉ふこと地理れ以て
 人心を収るに便りありしを知るへ

越之高志古志と書し頸城と云へ今の古志と云ふ一説あり
明神の高志に降り玉ふ又々飯取九鷲など云ふ兇夷ありて
抗抵しければも數年の後に誅に服し又の降伏し一國初
めて安寧なす明神即ち教を明にして導き玉へは洞居樹
巢のもの被髮文身のもの漁獵耕織の方を知るとを得たり

●高志の要害

高志の要害は越國の尤もよき要害もや後年阿部比羅夫公
阪上田村磨公來り治め玉へたるを想ひ合すへし又夷醜れ
據りて以て強大を致せば殊に此要害の地にありしを記臆
まへしヲロチ。ヨホシ。イ、トリ。クモズ。の如き夷醜の強きを
のなりかゝる處へ降臨すことその艱難名狀をへらさ
るものあるは察するに堪たし明神の英烈雄武にませる
此等あまたの艱難を凌ぎ民を撫て國を治め玉ふとて芳烈

永く傳はり威靈後も存する由因なり

●明神の部下

明神の降臨ありし後之処々に於て強猛なる夷酋すくあ
るを循撫歸伏せしめ玉ふ其甚しき弊惡なるは誅し否ざる
いその器を擇ひて職を授り一方の鎮撫に任し玉ふと異な
る明達と云ふへし當時明神の部下に雄豪の將帥七人あ
り禦侮折衝境を拓き衆を得たりその人となりをのべんに
南西の隅に魁然として卓立せるとクヒキと稱し力万夫を
兼ね威百獸を怖れしむ見ること遠く聞くこと精し南隅に
隆然雄視するはイホノ空云ふ鬼面蛇身攫撃自在掀奔電の
如し眼睛爛々鬚髮蓬々眞に偉人と云ふへし西部も寄傲す
るものそれ名をミシマと云ふ長顔矮軀にまて口を開けと
雲煙起り聲を放てと風雷鳴る中部に位するをコシと。カマ

ハチ裂云云コシと巨口長舌岩をうち山を抜き叱咤せられた
 乃ち裂く舟師をすべ隊伍を編みゆく大敵に當る方ハチ
 豊耳大鼻その状甚た奇なり鯨飲狼食えて喜怒常なくよく
 人心を量り知り策略適中す衆畏怖せまど云ふことなす
 北隅に虎踞するとエタリと云ふ廣額狹頬なれどを風姿高
 秀なり雄辨清談にして操縦機敏なり四夷みな用らるるを
 娛しむ極北に塞偃まるをれイワフ子と云温順敦厚或の處
 女に似たり矯捷奮飛山を越へ谷をどぶ飛鳥に如し軍をや
 り衆を招く手足の如く語少す云のす相貌堂々威風凜々た
 り此等將帥の下には數多れ健兒あり雄士あり軍議ある毎
 に棋羅星に如く並ぶ真に越れ盛觀あり

●皇子北征

神武天皇即位一玉ふとり五百六十年崇神天皇の御宇に當

り越國凶夷服せず政令行れまどて大彥命の征討れ爲め軍
 を率へて進發一玉ふ明神部七雄帥兵を練了て四方
 を扼ま命窟第一玉ふこと甚しく露營して明神又祈り玉
 ふ七日此日天晴雲收り一望千里なり遙に明神尊影を拜
 述玉く不肖天皇任命を奉去遠く不毛に入り深く荒僻
 に來り凶を伐ち民を撫て天朝の恩威を宣て還ならんと
 欲す豈計らんや人困み馬疲を進退維谷る願くは冥助を得
 て天皇任命れ重を全せんと慷慨玉ひは明神尤なり
 とて髭を左右に拂ひ玉へり命率玉ふ人馬忽ち雄壯にあ
 り再び進行し七將帥に會釋し明神に謁まつりて國內
 れ安穩無事を祝ひ玉へたる命留まり玉ふこと一年寛嚴
 共濟恩威並ひ行れ衆民なみ業を樂み將士それ器に適ふお
 どを深く稱嘆し玉へ都に還り玉ふ爾來官使屢往來し武内

宿禰吉備武彦阿部比羅夫等巡回視察せりと雖遺風美俗他にまさりて秀てたるを羨玉るの理なり越國の開々こゝに基ま

●明神の征韓

即位紀元九百余年神功皇后は征韓の古來未曾有の珍事なれども不恭無禮のもどより道理に照して直に討伐せざるへうらま 明神の韓國の夷醜及に齎るに足らまど拒み玉へしも皇后の一念留り玉ふへきにあふすされの一朝は敗岨に百年の患害を遺すこと便なきことゝて七雄帥に号令し皇軍を加勢なし玉ふ七雄帥踴躍して遠征に赴く部属勇壯のもの二千五百人舟師一百八十艘を得て西をさして奮揚發向せり韓國の夷醜壘を高し溝を深久し堅城にとり利兵を備へ之れを拒くと雖いかで我將帥の雄武なるに敵

まへさや到处敗走せざるのあく數百は軍兵頭は空ふ叫て飛ひ屍の血を吹て倒る山川震ひ怖き草木も色を失ひける韓國忽ち平た衆兇みな伏えて初めて軍を旋す 皇后韓王は縛をとた罪を許し虜を放ち降を容れ玉へた、文籍を獲儒醫を携て還り玉ふ眞に千古に快事にえて万世の偉舉なり 神功皇后凱旋の空き弓矢もて磐石に左の如くかき玉ふと上記抄談に見ゆ

韓國の王は日本の犬なり

明神喜ひ玉ふと限あし州内の面目此より更に進歩えて庶衆漸く野蠻の風習を脱するを得たり國郡の區畫制度の洪範自ら後世に遺り州民の仰慕厚く歴世の崇敬斜あらま元明帝のとき宮殿の營造尤も備とるに鳴呼 明神の勳功偉徳赫々として日月と光を争ひ數千年後の今に至る

さて祭祀隆に繁榮加へることを豈偶然ならんや
 因又記す彌彦明神のイヤヒコと申すの由と貴さ御稱に
 して世の人の云ふ如た譯よあらずとぞ
 イとは飯乃ち飯食なとヤとと家乃ち屋舎也ヒとは被乃
 ち衣服コトの兒乃ち兒孫也 明神と勿体なくも吾人衣
 食住に不自由なりと志め玉ふ慈母の赤子に於たる如
 し衣食住既に足る兒孫の繁榮を希成育を願ひ玉ふこと
 その恩惠德澤の宏大はかりなし
 イヤヒコと申し上くる此謂と或翁の解釋いとも理なれ
 は此に記して備意に供ふるのみ

編者云く 明神の御傳記此に留まらば述へ度事のすくゝあつと雖も多忙中の
 筆にて暫く省略せり後篇の出来るをまち我州上古の有様を明にせよと云ふ

●新刊の公告

◎てにをは畧解 全 定價金拾錢

●本書は俳道深き大人の手に成るものにて一見その精妙をみるへ一俳道に志める人熟讀せば俳句の名作神入らん俳人必ず座右にをくへ

◎北越孝子傳 全 定價金拾五錢

●本書は縣下の孝子を洩ささむ収めたり幼童の人々を授くる此より好き書のあらざるなり世の父兄たるもの一本を購ひ玉へ

賣捌所 三條町 樋口書林 敬白

明治廿七年九月廿一日印刷
 明治廿七年九月廿七日出版

新潟縣南蒲原郡三條町字二ノ町第三百三十三番戸

著者 兼 樋口源吉

同縣同 郡同 町字三ノ町第九十九番戸甲

印刷者 野口貞造

